秀峰

発行者
秋田県立
仁賀保高等学校
同窓会事務局
TEL(0184)43－4791
http://nikaho-hsaa.com/

新しい時代の仕事

同窓会長　佐藤　正樹　◆4期◆

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんが新しい環境に早く慣れて、自分の人生を着実に歩み始めることを心から期待しています。

皆さんがこれから出ていく社会は、第４次産業革命といわれる変革期の真只中です。ロボット工学、ＡＩ、ＩｏＴ、ナノテクノロジー、３Ｄプリンター、自動運転、量子コンピューターなどの技術が発展し、私たちの生活は大きく変わるといわれています。就職、進学に関わらず、これから仕事を覚えていく皆さんは、そんな変化に対応していく必要があります。

ＡＩの発達により、今ある仕事の半数近くはＡＩに代替可能という予想もあります。極端な言い方をすれば、皆さんが今から覚えて身に着けた仕事は、やがてＡＩにとって変わられる可能性もあるということです。

では、これから先はＡＩに仕事を奪われ、人が要らなくなる時代が来るのでしょうか？実は、そんなに悲観した状況にはならないようです。

ＡＩは、命令されたことを忠実に判断するだけであり、自分で何でも考える万能の神ではありません。製造業で考えた場合、ある程度の単純作業の代替や、故障個所の特定などで、過去の事例と機械の状態を比較して確率の高い故障個所の特定を行ったり、日々変わる生産状態とそれに影響する機械や人、外部の状況から、効率的な生産計画を作成するなどの変化が起きるでしょう。流通、サービス業では、世界中の在庫や売れ行きを判断して出荷や生産計画を立てたり、消費者が好む傾向を分析し、売れそうな商品の企画を行えるかもしれません。しかし、各企業が同じＡＩを使用したとすれば、ＡＩの判断で最適、ヒット商品になるはずのものが溢れてしまい、結果的には効率が悪い、売れ残りが出るという非効率的な結果となってしまいます。それらを防ぐため、人は、ＡＩにどのようなデータをインプットして他の企業と違うより良い判断を、先に行わせるかということが大事になります。既に、証券取引の現場では、いかに良いＡＩを導入するかで収益が左右されるという実態があります。

ここまで書くと大体想像できると思いますが、ＡＩとてしょせん機械であり、人間が居なければ動かないということです。（映画ターミネーターに出てくるＡＩみたいに意思を持てば別ですが、現在のＡＩテクノロジーでは、判断する機能に善悪や倫理観などを制限をかけることまで研究されているそうです）これからの新しい時代の仕事では、ＡＩを使いこなす人材が必ず必要になります。ＡＩだけでなく、それをどの仕事に、どんな形で行わせるか。（ロボットに行わせるとか、３Ｄプリンターに作業をさせるなど）どんなデータをＩｏＴのどこに、どんなセンサーを組み込んで収集させるか。何かの作業をさせる場合、どのような結果が一番最適と判断させるかなどのことが重要となります。

これからの時代の仕事のやり方は、皆さんが直接仕事を行う職種は減り、ＡＩを上手く使いこなし、人は楽に、仕事の結果は最適なものを効率良く、最新のテクノロジーの使い方を考える事が必要になると私は思っています。

皆さんには、これからＡＩやＩｏＴ、その他の最新テクノロジーを理解し、対応する知識、スキルが求められます。また、それらは日々変化していくものと思われますが、絶えず最新の情報を得て学習し、対応していくことが不可欠となるでしょう。未知の世界ですが、皆さんには柔軟な発想と対応力でスキルを磨き、皆さんの力で新しい時代を作り上げてくださることを心より願います。

第41期代表幹事

３Ａ	佐々木	功
	高野	亜海斗
３Ｂ	熊谷	百音
	石川	合平
３Ｃ	齋藤	恭咲
	竹内	美将
３Ｄ	田口	

「にかほっと」での仁高祭

令和元年10月5日（土）に仁高祭を開催しました。今年度は初の試みとして会場を学校ではなく、にかほ市観光拠点センター「にかほっと」で実施しました。

吹奏楽部の演奏を行いました。この他にも音楽の授業発表、有志によるダンスや歌の披露がありました。

茶華道部は茶会を催しました。

屋台も設置。タピオカドリンクやホットドッグ、綿飴などを提供しました。

仁高祭を外部に移した経緯

生徒会顧問　小西　一幸

令和元年度の仁高祭は「にかほっと」で開催した。そこに至る経緯は次のとおりである。

【来場者アンケートより】

・施設が古く見て回るのに不便を感じた（主にトイレ）

・集計したところ来場者の大半が保護者であった

【実行委員会反省会より】

・来場者よりも自分たちが楽しむことを優先にしている催しになってしまった

以上の意見が昨年度の仁高祭実施後に得られ、改善の必要があると判断することになった次第である。

どの学校でも、学校祭の位置づけは「地域に開かれた学校」を想定しており、地域の人たちに来場してもらい、高校生の活躍する姿を見てもらうことにあると考える。しかし、調査結果にあるように来場者の大半が保護者となるとその意味合いが薄れてくる。また、中学生に来場してもらうことで、高校の雰囲気を感じてもらって仁賀保高校を目指してもらうことにつなげる、という側面もあるが中学生の来場者は少なかった。現に今年度入学生の９割が仁高祭に来場していない。（他の高校には行っている）

このことから、学校での開催が地域や中学生へのアピールになっていないと判断した。また、平成31年１月ににかほ市と地域連携協定を結んだことで、市の施設利用が柔軟になったこともあり、にかほっとでの開催が実現するに至ったわけである。

にかほっとでの開催に対しては、「学校祭なのに学校外での開催には疑問を感じる」という意見もいただいたが、結果として来場者の層が変化し、特ににかほっとや道の駅に立ち寄った人たちに高校生の姿を見ていただいたことは良かったと考えている。

学校での開催と違って諸々の制限があるため、従来型の催し物を見直さざるを得ない状況もあったが、本来の目的である「地域への仁賀保高校のアピール」という点を考慮すると、今後もにかほっと開催は継続していくべきであると考える。

「感謝」

佐々木　恵介　◆27期◆

仁賀保高校を卒業し、音楽を仕事としていく中で沢山の方々に支えられ、ここまで来られたのだなと今、改めて実感しています。

高校は野球漬けの毎日でした。部活引退後に何気なくギターを触り始めてハマり、クラスの同級生で後の相方となるマサと〝ゆず〟の話で盛り上がり、一緒にギターを弾いて遊んだ高校時代でした。

そして、高校卒業の日には、当時担任だった鈴木恵一先生に「クラスのみんなの前で歌ってくれ」と言ってもらい、その時作っていたオリジナルの曲を初めて人前で披露し、この時人前で歌うことの楽しさを知りました。

また、野球部の顧問だった勝田慎先生には野球だけでなく、人間としても鍛えていただき成長することができました。今でも連絡を取り合ってライブに来ていただいたりと僕の中で特にお世話になっている恩師のお二人です。

昨年、十二年間活動していたケースケ&マサを解散しました。その中で、沢山の方々に出会い、応援し支えてくださった方々に改めて感謝の気持ちを強く感じました。

これからはソロ活動になりますが、自分の音楽を通してもっと誰かの支えや励みになるような歌を歌いたい、地元のお世話になった方や自分の故郷秋田に音楽で貢献していきたいと思います。ライブだけでなく今年からボイストレーナーとして活動し、歌の楽しさや素晴らしさも微力ながら伝えていきたいです。

夢に向かうこと、自分のやりたいこと、歩いていく道の中で、感謝の気持ちや支えられていることを、自分はとても実感しました。この気持ちを忘れずにこれからも頑張っていきます。

「仁期生からのお願い」

校長　小園　敦

令和２（２０２０）年３月１日、第41期卒業生１０２名を加え、秋田県立仁賀保高等学校同窓会員は、８，０３０名となります。平成元（１９８９）年３月には２，０５８名という記録がありますので、平成の時代に約６，０００名の同窓生が母校を巣立ち、ふるさと秋田や日本、世界で活躍していることになります。昭和55（１９８０）年３月、第１期生が卒業してから40年、先輩方は、世界に羽ばたく第41期生を大歓迎してくれるでしょう。

私は、仁賀保高校第２期生と同じ年齢です。自称「二期生」、ちょっと気取って「仁賀保」の「仁」を活用し「仁期生」です。２期生の卒業アルバム（昭和55年度）には、私と同じ中学校出身者が18名もいます。６人の卒業担任は、全員私の知っている先生で、過去に各校で同職したり、お世話になった先輩教師です。思い出の写真を拝見して懐かしく感じると同時に、勝手ながら19人目として、アルバムに載せてほしい気持ちです。

同期、同窓生のつながりは、一生の宝物です。仁賀保高校で過ごした３年間の思い出を敷き詰めた、人生の宝石箱になります。昭和52（１９７７）年に誕生した仁賀保高校は、みなさんが入学した平成29（２０１７）年に40周年記念式典を行いました。したがって２０２７年、あと７年後には節目となる創立50周年式典があります。その時みなさんは25歳、同窓生として母校の式典に参加してください。また、どこで活躍していても、仁賀保高校同窓会の活性化に御尽力をお願いします。

在校生のみなさんには、卒業生の門出をお祝いすると共に、次年度以降、母校仁賀保高校のさらなる飛躍を生み出す原動力となるように御協力をお願いします。

最後に、仁賀保高校をこよなく愛する全ての「仁賀保生」にお願いします。霊峰鳥海の雄大なる絶景を目の当たりにした、最高の環境に感謝して、校歌の一節にある「世の光なる人たらむ」を合い言葉（アイコンタクト）に、これから歩む人生の途上で、「仁賀保生」としての誇りを胸に、自分らしさを追究しながら、「地域」に貢献して生きましょう。

四〇期生からのメッセージ

短大に入学して思ったこと

佐々木　愛　実

高校を卒業してまもなく一年が経ちますが、何気ない話で盛り上がって楽しい時間を過ごした高校時代にまた戻りたいと、日々思います。

私は高校卒業後、聖園学園短期大学に入学しました。短大に入り、挨拶、連絡、期限を守ること、字を丁寧に書くこと、言葉遣い、正しい日本語を使うことなど本当に基本的なことがこんなにも大切なのだと改めて気づかされました。

子どもたちは周りの大人が話すのをよく聞いていてそれを真似するのも好きなので、子どもの前では友達と普段話す時に使っているような言葉を使わないように特に注意しています。実習中も感じましたが、いつどこで子どもや保護者が見ているかわからないので、細部まで気を遣わなければならなくて大変だなと感じます。だけど、とても信頼につながる重要なことであることを忘れないようにしたいです。そのため、まずは基本的なことを、正しく習慣付くように普段から気をつけようと思います。

短大での勉強や実習を重ねる度に、「本当に保育士になれるのかな」と不安になりますが、同じく子どもが好きな短大の友達と励まし合い、子どもと関わる楽しさを共感しながらこれからも将来に向けて頑張ります。

優等生にならなくていい

備前　遥

高校を卒業して早一年。私は今、地元に新しくできた、とあるスーパーマーケットで働いています。社会人としてはまだまだ未熟な私ですが、これから社会人になる皆さんに少々アドバイスをしたいと思います。

一つ目。「高い目標を立てなくてもいい」

社会人になると、「目標を持って行動しなさい」と色々な人から言われます。大切なことですよね、目標。ですが、まともな目標、周りから応援される様な目標を立てる必要はありません。幼稚なものでもいいんです。日々生活していくと、ひょんなことがきっかけで「これだ！」と思える目標が必ず見つかります。それまでは、簡単で適当な目標でも大丈夫だと思います。（因みに私は、「クビになるまでは頑張ろう」でした。呆れちゃいますね。）

二つ目。「好かれようとしなくてもいい」

正直に言います。最低限のマナー、挨拶さえできれば、ある程度のことは何とかなります。なので、周りに好かれようとして本当の自分を見失わないでください。自分を偽らなくても大丈夫です。

最後になります。社会人になるということは、沢山怒られて沢山挫折するということだと思います。どんなに辛くても「限界」というものは、そう簡単にはやって来ません。流せる心と強い気持ちで、お互い頑張りましょう。

社会人一年目を振り返って

正木　遥　太

私は高校卒業後、ＴＤＫ秋田株式会社に入社しました。私は現在、技術系の部署に所属しており、主な業務として製造段階の製品の解析を担当しています。製造と比べて高度な技術と知識を要するのでとても大変な仕事です。しかし、その分、専門的な能力を確実に身に付けられるのでやりがいを感じています。

私が入社してから特に意識したことが、二つあります。一つ目は先輩や上司と積極的にコミュニケーションをとることです。会社からパソコンを支給されているので、メールで連絡を取ることも可能ですが、なるべく自分の言葉で用件を伝えたり質問したりしています。こうすることによって、より細かく話し合いが出来るので、強く意識して行っています。二つ目は人の名前と顔を覚えることです。技術系の仕事をしていると多くの人と関わりが持てます。しかし、その反面、名前や顔、所属している部署等をしっかりと覚えられないと業務に支障を来すことがあるので、この点についても意識して行っています。

どれだけ技術が進歩しても結局は人対人なので関わる人との繋がりを大切にして日々の業務に取り組んでいます。これからも人との繋がりを大切にし、人として、そして技術者として常にレベルアップしていけるように頑張ります。

思い出は忘れずに

植田　純　希

41期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。私は仁賀保高校を40期生として卒業し、東京都内の企業でシステム系の職に就いています。現在は、システム保守として取引先のシステムに不具合が出た場合の対応や、新しいシステムの導入の対応を担当しています。システム保守としては、よく聞く有名な企業の対応を任されることもあり、気を抜かずに仕事に取り組んでいます。

社会人として仕事に就いてもっとも強く感じたことは、まずはどんなことに関しても失敗を恐れてはいけないということでした。失敗はもちろん良いものではありませんが、失敗を経験することで身についていくこともあるのだとは、高校の時にもわかっているつもりでしたが、職に就いて改めて実感しました。

さて、仁賀保高校在学中でもっとも印象に残っている思い出は全校鳥海登山です。上長や取引先の方とお話するときも鳥海登山の話題を出したりしています。上京してから毎日見ていた鳥海山も見ることができなくなってしまいました。年末に帰省して鳥海山を久々に見ましたが、全校鳥海登山で登った当時のことを思い出しました。卒業生の皆さんも高校で得た思い出をいろいろな方々に伝えてみてください。

編集後記

同窓会報第56号をお届けいたします。

同窓会の記録をひもとくと、仁賀保高校同窓会の設立総会が開催されたのは昭和55年（１９８０年）２月29日のことでした。つまり、仁賀保高校同窓会は本会報の発行日前日にちょうど40周年を迎えたことになります。また、平成22年度（２０１０年度）には設立30周年記念事業として、本校正門脇にある校名看板の設置を行っております。

来たる令和２年度は設立40周年記念事業として何を行うべきか、同窓会役員の会議でもいろいろな意見が交わされております。同窓生のみなさまからもぜひご意見・ご協力をいただけますよう、お願いいたします。

また、令和２年９月には設立40周年の祝賀を兼ねた定時総会が開催される予定となっております。正式に日時・会場等が決定次第改めてご案内させていただきますが、同窓生のみなさまにおかれましては、ふるってご参加いただけますよう重ねてお願い申し上げる次第です。